東京白楊だより

第17号
6. 9. 10

函館中部新世紀の飛躍を前に…… 学校長 野田義成
百周年を明年にひかえて…… 白楊ケ丘同窓会長 藤岡敏彦
若い人のパワーに期待して…… 東京支部支部長 二上達也
第17回親睦大会報告記…… 副支部長 菅原大作
特集・「白楊時報」の心意気…… 第71期 片岡進
故・田中清玄氏を偲んで…… 森本貞子・第45期 田沼修二
第18回親睦大会特別講演「動物の故郷を訪ねて」…… 52期 菊池昶史

白楊ケ丘同窓会東京支部
旧制函館中学校
函館中部高等学校

函館中部新世紀への飛躍を前に

函館中部高等学校長
野田義成（55期）

白楊ヶ丘同窓会の会員の皆様方には、日頃から母校北海道函館中部高等学校の教育活動振興と発展に関しまして格別の御支援と御協力を戴き、心から感謝申し上げる次第であります。

顧みますと、本校は明治28年、本道初の公立中学校、函館尋常中学校として、函館山の山麓、元町に開校され、爾来、百年、その「育英の場」を現在地時任町白楊ヶ丘に移して99年、明治、大正、昭和、平成の四代にわたる時代的激変期を我が国の歴史と共に歩み、幾度かの校名や制度の変遷を経た後、今や名実共に教育実践の充実した伝統校北海道函館中部高等学校として道の内外にその存在を顕示しており、名門「函中高」の校運は日を追って隆盛の一途をたどって来ております。これも偏に、創立以来、同窓を中心とした多くの方々の御支援、御協力の賜物であり、ここにあらためて深甚なる感謝の意を表する次第であります。

さてこの度完成いたしました白楊ヶ丘第三代校舎は、その全景を函館のシンボルである函館山に見立てたコンセプトで仕上げ、また生徒玄関を中心とした前面は旧函館区公会堂をモチーフに、そしてそれを支えて聳える四本の円柱はポプラの大樹をイメージしており、前庭の記念碑「白楊魂」の台座は五稜郭のデザインでまとめてあり、全体的にはアイボリー系の落ち着いた色彩で彩るなど、その雄姿は本校の歴史と伝統を彷彿させる堂々たる風格を持っております。また、新校舎の内部施設は、各種の最新鋭機器を随所に導入したのに加え、様々な工夫を凝らした視聴覚室、LL教室、コンピュータ教室、作法室等の諸施設を有する一方、新体育館（一、三九五㎡）、柔剣道場（三五五㎡）、弓道場、プール等も意欲に十分対応できるように配慮しており、まさに新しい時代を生きる若人の「知性と感性の殿堂」とも言える第三代校舎が誕生致しました。

同窓の皆様方には既に御案内のとおり、母校は明平成七年には創立百周年の慶事を迎えることになります。この創立百周年の節目を飾るに当たり、白楊ヶ丘同窓会と函中高後援会は創立百周年記念事業協賛会を設立して下さり、母校の今後の益々の発展を期して、函中百年記念会館の新設等を中心とした諸々の事業計画の策定のもと、目下その事業遂行の為の募金活動を年内を一つの目途として精力的に展開して来て戴いております。募金に伴う具体的な方法等は協賛会の財務委員会の所管に属しますが、同窓各位におかれましては、母校のより一層の教育環境の整備・充実とさらなる発展を祈念しての事業計画の趣旨に温かい御理解と御賛同を戴くと共に、今後とも母校函中高への変わらぬ御支援と御協力を賜りますよう衷心よりお願い申し上げます。

"百周年を明年にひかえて"

白楊ヶ丘同窓会長
藤岡敏彦（45期）

九十周年の記念事業が終って、今度は百周年に向けて準備をしなければと思っている中に、このビッグイベントがあと一年後に迫って参りました。月日の経つのは、まことに早いものだと痛感する今日です。

百周年記念事業協賛会を発足し、総務：事業、財務、百年史編集、名簿編集、会計の各委員会を設置し、通算すれば数十回に及ぶ会合を開いて参りました。そして一つの形として出来上がったのが、名簿であります。春山委員長始め、多くのスタッフの、まことに精力的な御労作の賜であり、感謝に堪えない所であります。また、御協力戴きました各期の幹事の方々にも、心から御礼を申し上げる次第です。又、募金につきましては、目標を一億円と大きく掲げて居り、函中百年記念会館の新設に七〇〇〇万円を見込んで居ります。これは、新設後、道に寄附をする事により、税の特別控除を受けられる様、桜井道議会議長、畠山道議を通じて種々運動を展開しましたが、その条件は不可能と云う事になり、撤回する事と致しました。しかし、学校側の備品として、一〇〇〇万円あるいは一五〇〇万円前後のものは、免税措置が取れそうなので、この分については大口の御寄附の方に便宜を与えて差し上げる事が出来ると存じます。何れにしても、日本中が経済的に冷え切って居る現在、募金活動はなかなか思うようにまかせない状態です。しかし、この百周年の記念行事は、まこと千載一遇の機会であり、この時期に生れ合わせた事は、何よりも幸せな事であると思って居ります。東京支部の皆様にも何かと御迷惑をおかけしますが、よろしく御協力の程、お願い申し上げます。

同窓会の仕事をお引き受けする前は、特に用事の無い限りは、母校を訪れる事はまれでありました。しかし、この数年は一ヵ月に二～三度は校長室や会議室で会議を開いております。古い校舎や現在の三代目の校舎を見るにつけ、時代の変遷に目を瞠るものがあります。そして、昨年夏に取り壊す事になった、明治三十九年一月竣工の旧体育館（雨天體操場）が、八十八年の風雪に耐えて生き残っている姿を見るにつけ、歴史の重さとその輝かしさに大きな感動を覚えたのでありました。この後の大きな節目は百五十周年であり、二百周年でありましょう。

少なくとも、我々の年代の者は、この節目に遭う事はあり得ないとすれば、百周年こそが我々の人生にとっても、とてつもなく大きな出来事である筈です。

皆で力を合わせて、記念行事を成功させようではありませんか。

若い人のパワーに期待して

東京支部長
二上　達也（52期）

昨年は冷夏で作物の成りが悪く、例の米騒動は記憶に生々しい。

一転して今年は猛暑。長期気象予報は冷夏が続くとあったようだったが、実際はさにあらず、当てごとと何とやらは向こうからはずれるというやつでしょう。8月の初めに山形へ出張しました。天童市及び天童青年会議所主催の全国中学生選抜将棋選手権大会に出席です。

この大会は丁度15回目を数え、併せて記念講演会といった催しも行われました。

ちなみに本大会は名誉総裁に三笠宮寛仁親王殿下を戴き寛仁牌を賜っております。普通はお名前だけ頂戴して現品は主催者側が用意するものらしいのですが、宮様御自らデザインされ費用も全部御負担されたとのこと。御自慢の逸品であります。

殿下は大会直前に喉の手術のため出席不能となられ、信子妃殿下のみの御臨席ではありました。

妃殿下とはかねて顔なじみといったこともあり、御気安立てでしょうか、林葉直子の件などでお言葉を下されました。

「宮様（妃殿下は旦那様のことをいつもそう呼ばれます）は、二上さんは何も知らないんだろうねとおっしゃっていましたよ。」

私はただその通りだと苦笑するのみです。

私共の世界では、ほとんど問題にならないことが、テレビ、週刊誌、スポーツ紙などの大騒ぎは異常と言っていいくらいで、世の中平和だなの思いを強くしました。

ところで、こうした大会は全国規模だけに毎回相当な費用が掛かります。人的労力は勿論のこと、募金活動など苦労は絶えないものがあります。

それを突破してきたのは何と言っても青年会議所のメンバーの努力です。

また大会進行のたびに、ちょっとした工夫が見られるのも若さの活力があってのことだと思うものです。

もって他山の石となす。我々白楊会にもあてはめてみたい気がします。

会の発展なり、維持、継続を考えるとき、若い人達のパワーがどうしても必要です。

幸い現状はやる気のある人達が集まっており、その効果も感じられます。

冒頭にもどり暑さが続いて作物の育ちはよいのですが、むしろ育ち過ぎて困る状態が出てきたとのことです。即ち水不足、干ばつの恐れがあるわけです。この文が出る頃は答えが出ているのですが世の中ままならぬことが多く、その中で我々はあゆみ続けます。

当会の方針にも時には行き過ぎ、やり過ぎが出るかもしれません。是非とも会員皆様の暖かい御支援を賜りますようお願い申し上げます。

会員の皆様へお願い

東京支部長　二上　達也

会員の皆様には同窓会活動に対して日頃より御理解、御協力いただきありがとうございます。支部長就任以来約3年〝組織の充実と活性化〟をテーマに若いスタッフの方々と志向して参りました。

18年前の同窓会発足当初は旧制中学の諸先輩を中心に熱気溢れる大会が開催されました。現在は新制高校卒業の51期以降の役員構成で運営されており、会員約4千名中3千名の昭和24年以降の卒業生によって成り立っております。

来年百周年を迎えるにあたり、今一度同窓会の在り方について考えていかなければならない状況にあると思われます。会員の皆様には益々の御協力をお願い申し上げます。

一、年会費改正による値上げについて

これまで年会費は2千円を有志の方々の振り込みにてお願いしておりましたが、今年度の評議員会にて3千円に改正されました。理由につきましては郵便料金の値上げによって送料の経費増、事務所経費の予算化（昨年までは借室料は無料提供）などにより大幅な経費増となります。平成5年度の会費納入者は一〇六〇名（約25％）未納入者の75％の方々に御協力をいただくのも活動のひとつではありますが、当面は3千円の年会費に御理解と御協力をお願い申し上げます。

二、事務所移転について

この7年間にわたり事務所を提供していただいておりました福津理事の新宿事務所が移転される事になりました。

会員からの電話の応対や連絡、郵便物や資料の保管、年会費等の振り込み用紙の保管、記録、住所変更等の管理、役員会、理事会、ミニ評議員会等の会議、打ち合わせの為の会議室の提供等に年間を通して大変な仕事をこの場所でこなして来たのですが、その場所を他に探さなくてはならなくなりました。

事務所経費が予算化されたとはいえ、やっと月3万円の事であり、まだまだボランティアに頼っているのが現状です。

光熱費、電話代、ファックス、コピーなどの経費に消え、とても借室料とは呼べない予算です。

会員の誰でもが出入り自由のサロン的同窓会事務所の実現はまだまだ先の話の様です。どなたかそういうスペースを提供して下さる方はいらっしゃらないでしょうか。心当りをさがしております。

三、母校百周年に向けて

会員の皆様には来年のいろいろのお知らせにて御存知の通り、母校百周年に向けての募金活動も活発になってまいりました。函館本部の藤岡会長を先頭に大変な御努力がなされております。

東京支部も札幌支部同様に函館を離れて遠くより故郷を思い、母校の行末を見守りながら少しでも役立ちたいと思っております。

会員の皆様には御協力のお願いばかり申し上げてしまいましたが、これも同窓会が少しでも身近かなものに感じてもらいたいと節に願っての事、忌憚のない御意見をお待ちしたいと思っております。

白楊ケ丘同窓会東京支部
第十七回親睦大会報告記

副支部長　菅原　大作（65期）

〝心のオアシス東京支部を活力ある集いに〟をテーマに、白楊ケ丘同窓会東京支部の平成5年度「第17回親睦大会」が、10月15日（金）午後5時より、東京・港区南青山の「ハートイン乃木坂・健保会館」で、来賓及び同窓生約百六十人が参加して盛大に行われた。

今回の特別企画は、東京交響楽団の首席奏者を長く勤められたフルート奏者・星川龍二氏の「フルートとハープによるリラックスコンサート」と題した〝音楽とトークの夕べ〟が行われた。

星川氏は、昭和37年（第64期）、函館中部高校を卒業後、東日本交響楽団に在籍。その後、桐朋学園大学音楽部に進まれ、桐朋学園大学を卒業後21年間東京交響楽団に在籍され、51年から11年間首席奏者として活躍。その間、リサイタル活動やテレビCMでの演奏、ヨーロッパ公演などを行う。現在は、ソロ演奏活動やイベントでのリサイタル、室内楽など、第一線のフルート奏者として幅広く活動を行っており、シリンクス五重奏団のメンバーとしても活動中。また、母校の桐朋学園大学及びムラマツレッスンセンター講師として、後進の指導を行っている。

コンサートでは、フリーのハープ奏者で、星川氏とは室内楽の演奏仲間の伊藤元子さんの伴奏で、最初に、フルートの曲として最もポピュラーなビゼー作曲の『アルルの女』から「メヌエット」とグルック作曲の「精霊の踊り」の2曲を演奏した。

この後、星川氏は「普段の演奏会では、演奏だけに専念し、演奏とトークの両方を受け持つことはなく、マイクを前にしていると結婚披露宴の司会しているようで、大変緊張しているが、皆さんはリラックスして聞いてほしい」と笑わせながら、「今日は、私のフルートが主役なのだが、演奏しながらみていると、殿方の視線がハープの伊藤さんに行きがちだ。そこで、普段はなかなか目にすることがないと思われるハープについてお話ししてみたい。ハープの弦は、47本。演奏の前にその1本1本をすべて調律しなければならない。従って、ハープ奏者は一生の半分は調律に費やし、後の半分を演奏するという言葉があるほど、演奏前の調律に時間がかかる。

ピアノの場合には、コンサートの始まる前に調律師がきて平均律で調律して、コンサートが終わるまで使用するが、ハープは気温や温度、湿度、ライトなどの要因で弦が伸縮し、その都度調律が必要な微妙な楽器である。弦はほとんど同じ色に見えるが、各音階のドは赤い弦、ファが青い弦と目印になっている。また、足元にペダルが七個あってシャープとフラットの切り替えを行う。従って、両手両足を忙しく使わなければならない。その点、フルートはただ吹いていればよいのでそれほど大変な楽器ではない。もっとも、上手く演奏するために努力が必要だが……」と前置きして、テレビCMで演奏したドビュッシー作曲の『小組曲』より〝小舟にて〟とフォーレ作曲の〝シチリアーノ〟の2曲を続けて演奏。

この後も、高校在学時からフルート奏者を目指していたこと、北海道時代はフルート奏者がほとんどいなかったのに東京に大勢いるので驚いたことなどのエピソードや、「ハープは水の音を表現するのに最適の楽器」などと、成田為三作曲・野田暉行編曲の〝浜辺の唄〟や宮城道雄作曲の〝春の海〟、ニーノロータ作曲の〝ソナタ〟などの曲の合間に話しながら演奏。華やいだ雰囲気の中で室内楽を楽しむことのできた聴衆の大きな拍手を受けていた。

最後に、アンコール曲として〝リンゴ追分〟をソロ演奏し、今回のコンサートの幕を閉じた。

わが国のフルート奏者の中でも、第一線で活躍中の星川氏の演奏会ということで、会場一杯に聴衆が詰めかけ、フルートの甘い響きと爽やかなハープの音色に酔いしれていた。

そして、星川氏のコンサート終了後、会場を代えて、6時過ぎより懇親大会に移った。

懇親大会は、第69期・梅田やよいさんと第77期・青木和彦氏の司会で進められたが、開会に先立って「函館中学校校歌（同窓会歌）」を、第69期米木かおりさんのピアノ伴奏により全員で合唱し、大会

の雰囲気を盛り上げた。

次いで、二上達也支部長（第52期）が、「例年、会に先立って講演会を行ってきたが、今年は趣を変えてリラックスコンサートと題した、星川さんのフルート演奏を聞くことができた。華麗な演奏で心を洗われるような思いがした。演奏の星川さんとハープの伊藤さんには、改めて心から厚く御礼申し上げたい。

この白楊ヶ丘同窓会の第一回総会には、三百人以上が集まり大変な盛況であったが、最近は参加者がやや少なく、寂しい思いをしている。参加者が少ないのは昨今の不況のためと考え、次回以降は増えることを期待したい。ことに、2年後の平成七年は函中創立百周年を迎えることでもあり、その時期には大勢の参加を期待したい。

本日は、母校の野田校長を始め、札幌と函館の両支部長もお出でいただいた。また、函館市の東京事務所には、毎回多大のご支援をいただいており、東京支部を代表してここに厚く御礼申し上げたい」と述べた。

次に、あいさつに立った野田義成函館中部高等学校長（第55期）は「本校の建築・改築は4年目に入り、現在中央正面玄関の庭に、定時制が五稜中学といっていた時代があるので、定時制の方々の意向を勘案して、五稜郭の模様をデザインしたブロックを飾る作業を行っている。本年度の本校建築の予算は三億四千万円。全体の予算額は、校舎本体では29億六千七百万円。本年一杯で完成の予定だが、グラウンド整備やその他を含め総額では約35億円の道民の血税を使わせていただくことになる。

本年の入学試験の倍率は、新聞発表では1・8倍で、全道では上から2番目に高かったが、中学校の先生にうかがうと道南地区の中学生が実際に本校に入ってくる割合はおよそ20人に1人とのことであった。

現在、全校生徒は一、一一二人（男子六〇八人、女子五〇四人）で、男子が辛うじて多いが、現1年生は成績順に入った結果、女子が二〇〇人、男子一六〇人となった。男子校として出発し、新制高校から男女共学となっても伝統的に男子の割合が多かった中部高校もいずれは女子に主導権を握られるのではないかと考えている。

今年は、創立98年になる。卒業生は二万六千六百二十六人で、このうち明治28年から昭和23年3月までの旧制中学の卒業生が五千八百六人、現在の新制高校卒業生が一万六千九百一人、そして70年の伝統を持つ定時制の卒業生が三千九百十九人となっている。創立百周年を記念して名簿が作製されることになっているが、最初中部で学び、学制改革で東高校や西高校に転校した人、また他校へ転校された方々も全員名簿に掲載されるので、全体では約二万八千人の名前が掲載される予定と聞いている。

普通科高校としては、全道一古く、文部省の認可が明治28年3月14日、3月31日に開校している。2番目の札幌南高校が同じ年の4月1日開校なので、わずか、1日違いではあるが、全道一歴史ある学校と、胸を張って言えるのではないかと思う。中部と札幌南は、共に平成7年に百周年を迎えるが、記念式典を札幌南は中部に敬意を表して、10月14日の中部の百周年記念式典の1週間後に行うとのことである。

新校舎は、白楊ヶ丘の白亜のパルテノンとも言うべき素晴らしい建物になった。この新しい校舎で学び、教えるものは、共に個性を磨き、英知を探究して、学生として学ぶべき姿勢、人の痛みの分かる思いやりのある人間を育てたいと考えている。今後とも、皆様方の一層のご支援、ご協力、ご鞭撻をお願いしたい」と述べた。

次に、来賓として出席された三浦幸雄函館市東京事務所参事、鈴木尊子白楊ヶ丘同窓会副会長、田中哲夫函中創立百周年記念協賛会財務委員会委員長、守下光越同窓会事務局長、近藤達也同窓会函館支部長、三浦祐晶同窓会札幌支部長をそれぞれ紹介した。

来賓を代表して、鈴木副会長が「8年前の母校90周年の祝宴の時の思い出だが」と前置きして、「式典の後、全員起立をして、同窓会歌と3つの応援歌を歌うことになり、今は亡き山田先生の指揮のもとに大合唱が始まった。卒業後何十年も経っている方もいるので、歌詞カードを用意したが、歌詞をみることもなく、およそ二千人の人々の心が一つに集中して堂々と最後まで歌われた。頬を伝う涙を拭おうともせず、歌い続ける先輩の姿に大変感激したことを思い出す。

今、函館では百周年記念事業のために各部会に分かれ、それぞれの責任者も選任されて、事業を成功させるべく準備を行っている。母校の百周年のために、皆様方のふところと足を使ったご協力をお願いしたい。百周年の函館でお会いしましょう」とあいさつした。

次いで、田中協賛会財務委員長が「百周年記念式典は、平成7年10月14日に、函館市民会館と母校体育館で行われるが、記念事業は同窓会館の建築と記念誌を作成することになっており、事業費は一億

円を予定している。この事業費を捻出するのが財務委員会の役割だが、実態は募金委員会であり、各期の委員の方々と共に募金活動を推進する役割を担っている。皆様方のご協力を何卒よろしくお願いしたい」と百周年記念事業への協力を呼び掛けた。

また、三浦東京事務所参事は、木戸浦隆一函館市長のメッセージ〝第17回白楊ケ丘同窓会東京支部親睦大会のご盛会を心からお喜び申し上げます。日頃より皆様には企業誘致についての情報提供など函館市政発展にご尽力をたまわり、厚く御礼申し上げます。今後とも潤いのある人間中心の町作りを進めてまいりますので、皆様のより一層のご支援、ご指導をたまわりますようお願い申し上げます。貴会の今後ますますのご発展と会員皆様のご健勝、ご多幸をお祈り申し上げます〟を読み上げてあいさつに代えた。

この後、第54期杉田博子さんの音頭で乾杯、懇親会に移った。

会場内には、例年と同様に、東京事務所から寄贈を受けた函館の夜景や函館港、湯の川温泉、元町など、市内及び近郊の景観などをデザインしたポスターが多数貼られ、雰囲気を盛り上げた。

一年振りあるいは久し振りに顔を会わせた会員の間では、先輩、後輩の区別なく会話が弾み、随所で懐かしい函館弁が聞かれ、終始和やかな雰囲気に包まれていた。また、懇親会の合間には、ピアノの米木さんのお得意のソロ演奏のほか、懇親会の前に行われたフルート演奏会に間に合わなかった会員のために、星川氏のフルート演奏も行われた。

そして、宴が最高に盛り上がった頃、恒例の寄贈品の抽選会に移った。今回も、北海道産のジャガイモを産地より自宅へ直送する同窓会特別賞や函館の朝イカの宅配サービスのほか、洋酒やテレホンカード、雑貨類など、およそ80点が用意され、抽選会が始まった。会場内では、同期の仲間の一人に賞品が当たると周囲から大きな歓声が上り、また賞品が当たらないと不満を言う人など、一段と雰囲気が盛り上がっていた。

大会の最後には、函館中部高等学校校歌「火柱のはためく峰も……」を全員で合唱。次回の再会を約束して、午後9時過ぎ終了、散会した。

白楊ヶ丘同窓会東京支部ゴルフ部会
〝ポプラ会〟第一回コンペ報告記

平成五年十一月九日(火)・GMG八王子

平成5年11月9日、第1回目のゴルフコンペが開催されました。

二上支部長就任以来、楽しい同窓会をめざして、若返ったスタッフと企画1年半、評議員へのアンケートやミニコンペを経てのようやくの実現でした。

当日は22名6組のスタートで、最長老は36期の秋浜晴彦氏の77歳、そして40期の山村弥五郎氏は73歳で、ゴルフは退職してから始めて10年目という御元気さ。つい最近ゴルフを始めたばかりの51期平野哲夫氏は50がきれてニコニコ。二上支部長を筆頭とする52期は6名参加で総合優勝の竹沢氏、年齢別優勝の安藤氏等大活躍で次回の幹事役に決定。ウイルスの研究で籠りがちになる為、緑の芝生の上を歩けるだけで満足とドンジリさんは60期の山本興太郎氏。前日から泊りがけで大阪から駆け付けて下さった61期の松岡正泰氏はゴルフ大好きの元ハンドボール部主将のスポーツマン。会の運営費が赤字になってはと心配して下さった上に寄附までいただき感謝感謝。そして紅一点の66期の石塚昌子さんは労働基準監督署のお役人ながら有給休暇を取っての参加。朝のスタート1組目にドギマギでゴルフどころじゃなかった様でしたが午後の51は御立派。レディス賞のワイングラスは気に入ってもらえたでしょうか。これからは同窓会の女性ゴルファーの先達になってもらいたいと思っています。

慣れないコンペの運営を盛り上げて下さったのは、他でもない参加者の方々の同窓会を理解して下さる姿勢と、暖かい御協力によるものでした。

成功の何よりの要因は、前日からの雨がウソのように晴れ上ったお天気でした。11月とは思えない陽差しの中でのプレイが一同を一層和ませてくれました。

それと、アシスタントとして3名の女性役員が、ゴルフもしないのに掛けつけてくれたのも、楽しい雰囲気を与えてくれました。

どれもこれも、第一回目という手際の悪さをカバーしてくれるものばかりで、感謝感激の一日でした。

帰りの車もそれぞれの方向ごとに分乗していただきました。記念のワイングラスで一杯やりながら次回もまたがんばろうと思っていただけたらこんな幸せな事はありません。

平成5年度

評議員会報告書

平成6年度第1回目の評議員会が、5月13日「はあといん乃木坂」に於て開かれた。理事・監事・評議員の25名が出席し、午後6時30分、二上達也支部長の挨拶のあと、軽い夕食を済ませ、午後7時より、下記議案を基に会議が進められた。

〈議　案〉

1．平成5年度事業・会計報告
2．平成6年度事業計画（案）収支予算（案）
3．年会費の改定について
4．平成6年度役員業務分掌について
5．その他

会議は菅原副支部長が進行。以下に抜粋報告します。

1．配られた資料に基づき、菅原副支部長より事業報告、真船理事より決算報告があり、田沼監事による会計監査報告の後、承認された。
2．2．および3．については、菅原副支部長より「年会費改定に関する理由書」を基に説明があり、それを前提とした6年度事業計画案と収支予算案が発表され、若干の質疑の後、すべて承認された。なお、質疑事項として、

◇年会費に関しては、一定年齢（例・70歳）以上の会員に対する終身会費（一定額の一括納入または毎年納入の選択制）の前納制度の導入を検討すべき。→（理事会の検討事項とする）

◇現在雑費として計上されているが、慶弔費のうち葬儀の際の花輪は、弔電のみでよいこと。また、東京支部として弔意を示す場合の範囲について、規約または内規等で規定する。→（理事会に諮って決定する）などの意見が出された。

4．昨年度退任した北原副支部長の復帰に伴い、役員の業務分掌を若干変更したい旨、二上支部長より説明があり承認された。
5．68期児玉評議員より、勤務先の日航を利用して、来年の母校百周年行事に重ねて同期会等を函館で行う予定のある会員に、格安ツアーを企画できるとの説明があった。具体的な計画を直接児玉さんに相談してもよいし、今年の大会の案内と共に宣伝して募集することも考慮したい…というところで会場の時間切れとなり、午後8時30分閉会となった。（詳しくは直接68期児玉さんまで）

また、昨年度からの大きな課題でもあった組織強化の一環として、組織担当で強化推進に積極的な土橋理事の発案・企画で、ミニ評議員会が実現した。第1回目は3月17日（63～72期）、第2回目は4月13日（73期以降）に、いずれも支部事務所において、評議員活動の活発化を期しての打ち合わせを行うと共に、二上支部長はじめ、副支部長、理事等との親睦を図る役目も果たした。この第一歩を足場として、評議員から会員へと、少しずつでも輪が拡がっていくことを願いつつ、地道ながら今後も努力を続けたい。

「函館中部高校百周年記念ツアー」に参加しませんか。

平成7年10月14日の函館中部高校百周年記念式典に参加後、同日夜に同期会を計画されている期も多いかと思います。

この機会に久し振りに「里帰り」とか親子や夫婦で北海道・家族旅行を計画するのも楽しいかもしれません。

そこで、日本航空では「函中百周年記念協賛の格安ツアー」をお作りいたしました。1泊2日か2泊3日の函館ステイを基本としておりますが、その他ご希望がございましたら何なりとご相談に応じます。

できましたら、同期会幹事の方がとりまとめてご希望の便名及び日程をご連絡下さい。

詳しくは、今年10月21日の東京支部大会にてお知らせする予定です。

児玉　久美子
68期（昭和41年卒）
日本航空　東京支店
レザベーションセールス部
TEL〇三－五二五九－三七一〇

白楊ケ丘同窓会札幌支部大会に出席して

東京支部副支部長
杉田　博子（54期）

平成6年度の白楊ケ丘同窓会札幌支部総会が、6月25日札幌セントラルパークで開かれ二上支部長の代理で出席いたしました。うっとおしい梅雨の東京よりさわやかな北の国に降り立ち空気の美味しさに深呼吸するほどでした。5時30分からの総会には物故者への黙禱に始まり三浦支部長を議長に、副支部長の高橋さんの事業報告、会計報告を経て懇親会に入りました。およそ80名程の出席者の中で長老の厨川さんが乾杯の音頭をとり終始なごやかに歌も出たり、あちらこちらで再会を喜び合っておりました。来年は母校の百周年にあたりますので珍しい写真や文書など資料収集に役立つものを持っている人は、函館中部高校同窓会事務局へ御一報下さいとのことでした。

奇しくも卒業以来の友人にも会えたし同窓会って良いものですね。

〝ふるさとは遠きにありて想うもの〟とどこかの人が云ったけれど、私には〝ふるさとは帰って良さを味わうもの〟だと痛感しました。

最後の万歳三唱は、90期の可愛いお嬢さんが音頭をとり、時代の流れを感じた次第です。

帰途函館へ寄り、父母の墓参も済ませ楽しい旅でした。

牛に似し故郷の山つつじ燃ゆ　博子

北海道・高校新聞の嚆矢

白楊時報の心意気

第71期（昭和44年卒）片岡　進

平成6年の正月は函館の〝飲み会〟で明け暮れた。中学校（中央中）同期会、高校（我妻学級）クラス会、新聞局（白楊時報）OB会……。3年前に急性肝炎で死にかかった亭主を心配して同行してきた女房が、さすがに堪忍袋の緒を切ってクラス会の会場に躍り込むという修羅場もあった。おかげで帰路につく函館駅の待合室では口もきかず、やむなく私は駅の中の本屋で時間をつぶしていたが、奥まった本棚の片隅で「北海道高校新聞戦後史―ペンにかけた青春―」（武石文人・平井湜共著／北海道新聞社刊）という一冊と出会った。まったく何が幸いするかわからない。

東京に着くまでの列車、新幹線の中で一気に読んだ。あちこちに函館中部、白楊時報の文字が現れ、北海道高校新聞界をリードした当時の我等の自負が改めて高鳴った。

「白楊時報」という新聞を覚えているだろうか。私たちの時代は、夏休みや冬休みの前後に年2、3回発行されていた。「背伸びしながら、訳のわからないことをほざいている」と一般の生徒からは余り関心を持たれず、弁当の包み紙にされることも多かったが、この「高校新聞戦後史」によると、我が白楊時報こそ高校生が自ら編集発行した北海道高校新聞の嚆矢（こうし）、第1号なのである。

「……このような時代に、表現と活字化の念やみがたく、全道高校新聞の嚆矢として創刊されたこと、しかも、年5、6回に及ぶ活発な編集発行を行った……」と創刊当時のことが記録されている。

創刊は函館高校時代の昭和23年7月。函館商業の「五稜ヶ丘」は昭和2年創刊だが、学校主導で作られてきたもので、生徒の手に移ったのはずっと後のこと。ほかにも札幌、小樽、旭川の高校で「我こそ第1号」と称しているところがあるが、多くはガリ版刷りであったり、学校やPTA主導であったり、現物が残っていなかったりで、確かな活版刷り（タブロイド4頁）で存在するのが白楊時報なのである。

◆部室は吹奏学部と食堂の間

昭和41年、小学校、中学校を通じて壁新聞、ガリ版新聞に凝っていた私は、函中入学と同時に新聞局に飛び込んだ。当時の新聞局は旧体育館の奥の廊下の突き当たりで、吹奏学部の練習場と食堂の間の狭い一角にあった。

テーブルの上に2年先輩の菅原繁昭、上野（現梅田）やよい等がつくった沖縄問題特集の最新号が積まれていた。沖縄の高校生からの寄稿もあり、高校新聞のレベルの高さにいきなり刺激を受けた。

ほぼ同時に入局した新人生に、種畑徹、谷地田明、鈴木良伸、畠山紀夫、吉田元久（在校中に有島武郎文芸賞受賞）、長峰直子、田斎恭子……と、政治、文学、風俗等々に関心深い連中が集まり、それまで各学年2、3人で細々としていた新聞局が一気に活気づいた。

何しろガラス壁1枚向こうがブラスバンドなのだから、練習中は編集会議も原稿書きもできず、ブラスバンドの連中が

〝新聞〟への情熱あふれる創刊の頃

昭和23年7月10日の白楊時報創刊号には、早熟だった当時の高校生の開拓者精神と自らの手で作りはじめた「新聞」に対する理想と情熱に溢れた格調高い創刊の辞が掲載されている。

「新学制の発足にあたって、函中50年の歴史と伝統に立脚し、混乱の世相に、真正なる報道と、思索の糧と、現実批判の材料たる諸種の学園にまつわる記事を提供し、函館高等学校向上の標識と、新たなる伝統の確立に参じ、高校文化に寄与せんが為に、本紙を創刊する。絶望に近い嵐の季節に、一切の悪条件を排して、この目的の為に、真実の炬火を以て、立ち上がった吾等の前途は多難そして俊嶮である。理想は現実の奔流に押し流され、低落して止まる事を知らぬ国民生活である……。しかし、学生の真実なる認識を通す世界は新しい意味と色彩を以て、無限に展開して居る。学生ジャーナリズムの課題が此処にある。」

この創刊号から第3号まで、亀井勝一郎氏が「人間の誕生～故郷の若い人へ」という文を連載で寄稿している。『……生涯迷う人間に青春がある。年齢と関係のない永遠の青春というものがある。青年とはこの青春に向かって進むべきものであって、青年といふ生理的事実そのものが必ずしも青春であるとは限らない。迷ひを避けてばかりいる青年も少なくないのである……』（創刊号より）と、40代半ばになった我々にも含蓄深い言葉を残されている。

亀井勝一郎氏に原稿依頼したのは当時の新聞局員・藤田俊太郎氏（51期・現札幌在住）で、「今は貧しいので稿料は払えないが、後輩のために、日本人の精神の再建のために、助力をお願いしたいと三鷹のお宅に速達を出した。亀井勝一郎氏は直ちに原稿を下さった。几帳面な字体と丁重な激励の言葉を添えられていた。私は氏の人格に膚接の思いであった。……氏が物故された時、私は『白楊時報』代表を僭称し、弔文を送った。自分の青春のようなものが、確実に終わったことを感じながら……」と述懐している。

帰ってから夜9時頃までが新聞局の活動時間となった。原稿締め切りの頃は、守衛見回りを息を殺してやり過ごし、徹夜で仕上げたこともあった。時には隣の食堂から残り物のラーメンや菓子パンの差し入れもあったが、不思議に食糧の調達費には困らなかった。広告収入という余禄があったからである。

広告主は函中卒業生の病院や商店が主だったが、「新聞らしい広告を取ろう」ということで、函館映劇や棒二デパートの売り出し広告も入れ、おかげで発行日を遅らすことができない状況に自らを追い込んだ。

●文部大臣賞の栄光も

資金が潤沢になったところで、タブロイド版8頁、写植オフセット印刷に切り替えて紙面を充実させ、それまで函館でやや後れをとっていた「白楊時報」は、ライバルの函商「五稜ヶ丘」「函館水産高校新聞」「ラ・サール・ニューズ」に差をつけた。

資料を集め、議論を重ねるほどに論調は左がかってきたが、それにブレーキをかけ、違う視点、立場からも物を見るバランス感覚を教えてくれたのが顧問の沼崎信夫先生（現苫小牧東高）だった。

発禁覚悟の号も沼崎先生のアドバイスで救われ、ベトナム戦争、函館市の将来展望、読書離れする高校生などを特集したその号が、北海道新聞社のコンクールで見事一席（文部大臣賞）を射止めた。ちなみに第二席（道知事賞）は函商「五稜ヶ丘」で、「北海道は高校新聞のメッカ」と言われた中で、函館の高校生ジャーナリストが一際高いレベルにあったと伺われる。

白楊時報は昭和50年、函中創立80周年記念で縮刷版を作成した。札幌西校に次いで道内2番目とのこと。我が家にも2冊あるはずだが、あまりに大切に物置の奥深くしまわれて容易に発掘できないため、「北海道高校新聞戦後史」の中で紹介されている抜粋記事の再掲でお茶を濁させていただきたい。

前後の脈絡が見えず、まさにバランスを欠いた誤解を生む断片ではあるが、さまざまな問題に目覚めた当時の高校生の意識の片鱗を垣間見ることができれば幸いである。

ただ取り上げられているものが、いずれも私が在籍していた時期（昭和41～43年）を挟んだ昭和40年から昭和47年までのものばかりで恐縮だが、当時の社会情勢と絡んで、たまたまこの時期にある面でのオピニオンリーダーとなる巡り合わせにあったということでご容赦願いたい。

抜粋記事
沖縄、ベトナム戦争、白楊祭……
問題に目覚めた高校生の意識

●沖縄問題／在日米軍問題

「米国は沖縄の軍事的支配が目的である。……しかし、そのためになぜ沖縄人民だけが犠牲とならなければならないのだろう。……実に沖縄の人たちに申し訳ないと思う。それに米国は沖縄から絶対に手を引くべきである。世界の平和を考える上にも、軍事力がある以上真の平和というものも訪れはしないだろう。平和の立場を考える上から、少なくとも沖縄の軍事施設は取り除いて早く日本に復帰させることを願う」（66号／昭40年11月）

「歴史的な大事件は、全く突然に起こるものでなはい。時間の経過の中でそれを爆発させる条件が徐々に蓄えられていくものなのである。だからこそ、我々は歴史の展開の中に後の大事件の兆候を認めることができるのではないだろうか。一九六七年の末から現在なお進行しつつある世界情勢の急激な変化はまさに歴史上の転換期をさえ思わせるものがある。さらに注意すべきことは、日本がその流れに密接な関係を持っていたことである。（略）……日本はほかにも数多くの諸問題を抱えている。我々はマイホーム主義を捨て、マイネイション主義に立って、それらを十分討議し、その結果を国民すべての意思として政策に反映させるよう働きかけるべきであろう」（71号／昭43年6月）

●ベトナム戦争

「具体的に平和への道を追及してみよう。まず根本的な方法がベトナムのことはベトナム人の手に任せるということであるには疑いがない。では、どうすればそれを実現できるのか。それは単純に、外国軍隊の撤退であろう。しかし、アメリカには先に述べたようにベトナムから手を引けない理由があり、その経済状態からみても恐らく無理な要求であると思われる。（略）……我々はアメリカの責任を追及することはできないのではないか。なぜなら日本はアメリカのベトナム政策に大きな貢献をしているからである。我々は、日本人としてアジア人として、この問題に無関心ではあり得ない。もっと考える必要に迫られているからである。われわれはこのベトナム戦争に、なんらかの義務を持っていないだろうか。（略）……補給が勝敗に大きく影響するという近代戦ではベトナムに近くアジア最大の工業力を持ち、アジア戦略のかなめ沖縄を持つ日本は、戦争遂行の重要基地なのである。また、ベトナム和平の動きに株価が大きく下がった日本経済なのである。まさにハイエナ的だといえよう。」（70号／昭42年9月）

●学園祭への問いかけ

「われわれは一体あの貴重な時間までも返上した白楊祭準備期間である数日間と、フォークダンス等一種の馬鹿騒ぎ的に行われた白楊祭の行程に何を見いだし、何を創造したのであろうか。……そして白楊祭を既成の『祭りごと』として処理し続けていったのである。その結果、我々は、白楊祭という『祭りごと』の行為の理念すら理解されないまま〝楽しければ良い〟的無意志であの白楊祭に参加していったのであった」（76号／昭47年7月）

この〝白楊時報〟の特集は次号に続ける予定です。当時新聞局に在籍した方々に思い出やエピソードがありましたらぜひ寄稿される事を期待しております。

故・田中清玄氏を偲んで

益田喜頓と田中清玄

ノンフィクション作家
森本貞子

「正論」三月号より

北海道函館出身の異色の人、益田喜頓と田中清玄が平成5年末、相次いで他界された。喜頓さん84歳、清玄氏87歳、どちらも明治末期の函館生まれで、大正時代にこの港街で成長された。

戦前の喜頓さんはコメディアンとして、戦後はミュージカルの舞台で貴重な脇役として知られ、清玄氏は戦前の一時期共産党員として名を馳せながら脱党後、戦後の政財界では舞台裏の怪物といわれた。

全く異なる分野で異質な活躍をされた二人なのに、共通点がある。揃ってダンディでおしゃれで、しかも心配りが細かで、どちらも礼儀正しさでは定評がある。彼らの目は常に海外に向けられていて、広い意味での国際派なのである。

平成4年8月函館市旧英国領事館（開港記念館）が開館され、展示パネル原稿、およびミニュチュア人形の監修に当たった私は、開館式の際、市から感謝状を贈呈された。壇上で一礼して目を上げると、招待席の最前列中央におられた喜頓さんと目が合った。彼はにっこりと会釈を返して下さった。喜頓さんは濃紺の背広に淡いブルーのワイシャツ、ワイン・レッドのネクタイがダンディだった。

長身で細身な喜頓さんの後ろ姿に私は「体型まで似ておられる」と半年ほど前の平成3年12月、オーストラリアのオットー大公招待レセプションでの清玄氏を想い浮かべていた。大公はハプスブルグ家の現存する数少ない貴公子で、清玄氏が来日を要請されたのであった。出席の遅れた私を清玄氏は「どうされたのか」としきりに案じておられたそうである。

そのときの清玄氏はやはり紺色の背広、水色のワイシャツに紺色のタイがきまっていた。ステッキを手に来客と丁重に挨拶を交わす氏に、私は「風と共に去りぬ」の舞台で喜頓さん扮するミード博士のステッキ姿を重ね合わせていた。

「風と共に」の主役スカーレットは大地真央、レッド・バトラーは松平健、喜頓さんはいわば脇役である。喜頓さんの当たり役は、そのミード博士、そして「マイフェア・レディ」のピッカリング大佐、「屋根の上のヴァイオリン弾き」でのユダヤ教司祭など、すべて赤毛物である。益田喜頓の芸名もまた、彼の好きなアメリカの喜劇役者バスター・キートンをもじったものとか。喜頓さんの得意な役柄は、どれも翻訳劇である。

清玄氏もまた戦前、すでに中国へと想いを馳せ、密航してまで鄧小平に会いに行ったそうである。戦後は日本へのアブダビ石油誘致交渉で活躍し、オーストリアのカレルギー氏、オットー大公および世界的経済学者ハイエク教授と親交を結ぶなど、常に国際的なのである。

このようなお二人の共通項は、生まれ育った故郷函館の特異な歴史と深く関わり合っているように思われる。

お二人が成長期にあった大正時代の函館は日露戦争の勝利に沸き、世界三大漁業地のひとつ、北洋の漁業権を傘下におさめ、その中心港が函館。水産物取引の集う米英仏露支（中国）等の外国船が港を埋め、外来船は同時に西洋の文明文化を運んできた。当時の函館人は外国が憧れであり、紳士たちは競って洋服を着用し、青少年は直輸入のレコードに酔った。ともに国際派となられた喜頓さんと清玄氏は感受性鋭い少年期の国際都市函館の影響を濃密に受けて、いつも海の彼方をみつめて成長したのだろう。

しかも明治以後、急速に発展した函館は全国からの移民の街で、住民たちは身元も家柄も分からぬ他人同士、その上、北洋景気は貧富の差を拡大させただけに、相互の信用度は相手の態度によって判別し、人々の身分査定の物指しが服装（ファッション）だった。函館競馬場に出入りするには正装した紳士淑女でなければ許されず、さながら英国アスコット競馬場の趣、着衣（ファッション）が物を言う函館の当時の状況が喜頓さん、清玄氏の洗練されたファッション・センスに反映しているのだろう。しかも大正末期でさえ、函館の貯金高は札幌を抜いて北海道第一位。

だが札幌はあくまでも北の首都であり、函館は脇役に過ぎなかった。喜頓さんは舞台上での貴重な脇役、清玄氏も政財界の舞台裏の黒幕と言われたのと似通っているように思われてならないのである。

曲折の人生、多彩な人脈持つ「怪物」田中清玄氏死去

政財界の裏側に通じ、多彩な人脈と行動力から「昭和の怪物」と呼ばれた田中清玄（たなか・きよはる、通称せいげん）氏が十日午後十一時、脳こうそくのため死去した。87歳。

北海道に生まれ、東大に入学後、共産党に入党。その後、党員の一斉検挙により壊滅的な打撃を受けた党を再建し、武装闘争を指揮。昭和五年、治安維持法違反容疑で逮捕され母親の自殺などを契機に転向した。

以後、反共主義者となり、土建会社などを経営しながら電産争議や王子製紙争議では労組切り崩しの先頭に立ち、インドネシア政変の際はスカルノ打倒運動を支援したりした。

同三十五年の安保闘争では全学連の故唐牛健太郎委員長らに資金を提供して話題を呼んだ。

三十八年には故田岡一雄・山口組組長や故市川房枝・参院議員らと麻薬追放運動に乗り出したが、暴力団員に短銃で撃たれ、重症を負った。さらに民族派の立場からペルシャ湾岸の石油開発や輸入コンサルタントとして活躍した。

五十一年に総合人間科学研究会を設立。理事長として国際情勢を分析、五十五年には非公式ルートで訪中し当時の鄧小平副首相と会談した。

平成五年十二月十一日
読売新聞記事より

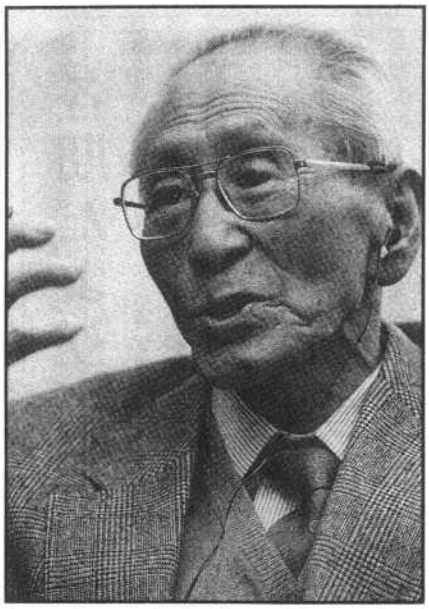
生きながら伝説の人
～田中清玄～

東京支部監事
田沼修二（45期）

●伝説の始まり

昨年9月刊行された「田中清玄自伝」は出版界の大きな話題となり、売行きを伸ばしたが、新著の腹帯の宣伝文句に「日本で一番面白い人生を送った男」とあり、正に言い得て妙であった。

私が函中から弘前高校に進学した時、母から「函館から弘前に進んだ田中清玄という男が、共産党で活発な運動をし、産婆さんをしていた母親が申し訳ないと切腹した事があった。お前もそんな事にならないように」と諭された。旧制函館中学・弘前高校の20年ほど後輩に当たる自分には、爾来、氏の名前は念頭を離れなかったが、戦争末期の弘前高校では田中清玄の名前は、若くして既に伝説上の人物であった。



●波乱の軌跡

公にされている歴史や「自伝」に見る氏の生涯は、戦前の「武装共産党事件」による入獄と母堂の自裁。出獄から三島龍沢寺での参禅、敗戦直後の昭和天皇への直言、激発する労働争議の切崩しを図る反面、60年安保では全学連唐牛委員長の岸内閣打倒を援助。かと思えば山口組の田岡組長と手を組んで麻薬追放運動に挺身。また一転して無資源国日本のエネルギー確保のため産油国を歴訪奔走。最晩年は日中友好を基盤とするアジアの安定と、米露の覇権を排除した世界平和実現。環境汚染を克服する闘いに精力的な活動を展開。

左翼、あるいは右翼と言われ「国士」「黒幕」「怪物」「フィクサー」と様々な呼ばれ方をしたが、勿論氏の本質は一片のレッテルで片付けられる程単純なものではなかった。振幅激しく全貌を把握し難い氏の生涯は、「生きながら伝説の人」であり、確かに「日本で一番面白い人生を送った男」であった。

●田中清玄語録

20数年前オイルショックの頃、宴席で氏に話を伺った事があったが、エネルギー問題に関する造詣の深さ、世界を股にかけての奔走振りに加えて見通しの的確さ、全世界に跨がる人脈とそれを結ぶ行動力にただ驚嘆するばかりであった。

酒が進んで談論風発となり、たまたま私の質問が戦前の氏の活動と母堂の事に及んだ時、氏は返事をせず突然「すべて終わった昔の事だ」と言いながら目の前の盆を手刀で打つと、空手の技で盆は綺麗に二つに割れた。「いけない、触れてはならない虎の尾を踏んでしまった」と自省して、直ちに話題を変えたが、氏の心の奥の一部を垣間見た思いであった。

函中や弘高の同窓会の集まりや、在京の函館および周辺の出身者で作っている道南会などで、氏にお目にかかる機会は少なくなかったが、いつもダンディに着こなし、温容端然、嘗ての闘士の雰囲気はなかった。しかし乞われて演壇に登ると、別人のように烈々と信条を吐露して止まなかった。いま手元に6年前、弘高同窓会での氏の講演録がある。題は「病める地球の再生と死滅しつつある宇宙全生命体群の救出こそ吾々人類の最大の課題だ」とある。その中の語録に

◇私の80余年の人生は、迷いと失敗の連続で、残るものは人生と宇宙に対する疑問のみである。

◇レーガン大統領とゴルバチョフ書記長は人類の真の平和をもたらし得るであろうか。彼等は、地球が当面している各生命体群の幾億年かけて生み出した調和とバランスが崩壊して行くのを、如何に阻止し調和と共生を取り戻すか、人類の根本的苦悩の解決を真剣に考えているか、私は非常な疑念を持つ。

◇米ソ不戦と両国による世界の独占分割支配の危険性。既に十数年前から中国の鄧小平さんは反覇権主義を標榜し、軍事力、経済力、イデオロギーによる他国の主権の蹂躙を厳しく戒めている。しかし世界の現状はアメリカとそれに追随するソ連による覇権主義の危険に溢れている。

◇あらゆる宗教は平和と魂の救済を説いて止まないが、世界各地の紛争の現場を数限りなく見聞した自分には、人間の殺戮本能は、捨去る事のできない負の本能心理と考えざるを得ない。

◇病んでいる地球をどうすれば良いのか。人類もその一部である生命体系は、大気汚染、放射能汚染など環境汚染を克服出来るのだろうか。

◇このような人類生存の危機はアメリカ流の文明、ハイテクノロジーやバイオテクノロジーで救い得るのだろうか。

80余年の多彩な人生を送った氏の最晩年の思索が、この様な悲観論に満ちていることは、現代世界の病根の深さを明示し我々に大きな課題を投げ掛けている。

●會津の士魂

「自伝」の出版記念会を弘高の有志が企画したが、12月10日に氏は逝去され急遽、追悼会に切替えたが、その会で氏の出自について感銘深い話を聞いた。

氏は會津藩筆頭家老の末裔で、曾祖父は幕末の騒乱の中で責めを負い割腹している。もともと會津の士魂は、江戸時代初期、會津に生まれた山鹿素行の教えに発している。素行は後に江戸に出て諸藩の指導者に大きな影響を与え、赤穂義士が山鹿流の兵学を学んでいた事は有名である。幕末、會津藩と激しく対立した長州藩の吉田松蔭は山鹿流を講ずる師家の出身であった。江戸初期、山鹿素行に発した学統が、幕末に勤皇と佐幕に別れて争った歴史の悲劇を思わざるを得ない。

いずれにしても不屈の闘志、強い信念、弱者への愛情など、氏の生涯を律したものは、祖先から受継いだ會津の士魂の最も良質の部分であったと言えよう。

各期だより

東京函八会（35期・昭和8年卒業）

梅雨入り前の好天気にめぐまれた平成6年6月6日正午、恒例の「春の東京函八会」の集いを大手町の永楽クラブで開催。はじめに、幹事から会員の消息報告、この期間の逝去者の冥福を祈る。黙禱。次いで、奈良から、いつも上京傘下の新田義圓君の発声で乾盃し、歓談に入った。

皆、寄る年波で、話題は主として健康談義になったが、宴半ばになり、高橋治雄君により日頃励行している「大極拳」の話があり、実技を演じて披露され、一同感銘を深くした。

談論風発、話は盡きないが、一同揃って、記念撮影をし、再開を約して、散会した。

当日の出席者、岡崎弘、佐々木孝充、高橋治雄、新田義圓、松丸秀夫、村上敏雄、藪越甲平

（藪越甲平　記）

喜寿を超した我々仲間
十楊会（37期・昭和10年卒）

昭和10年に函中を卒業した我々には今年全員喜寿を超した。同期二一三名の卒業だったが、現在生存者は半数を割ってしまった。

これまで、東京、函館、札幌の幹事廻り持ちで毎年全国大会を開催していたが、お互い世間並み高齢になったので、幹事の負担、参加者の健康状態等を考慮し、今後全員に呼びかける全国大会は取止めることにした。でも有志だけでの旅行計画は続けてゆくつもりである。

来年は函中創立百周年、我々同期の卒業60周年に当る。この機会に函館で最後の全国大会を盛大に挙行しようと函館の幹事が張り切っている。

我々が教わった恩師で生きている方は佐久間安三郎、水野憲、松倉恒夫、萩原獅郎の四先生のみとなった。各先生とも首都圏にお住いである。

本年の全国大会は東京の当番で5月10日、上野公園近くの弥生会館で開催した。参加者17名、北海道から8名の出席があった。夜の更けるのも忘れて、昔話に花を咲かせたのは何時ものとおりであった。翌日は朝早く東京駅を出発して、新潟、佐渡旅行に出かけた。ジェットフェリーが就航したので佐渡観光も手軽になった。私は恥ずかしながら、いままで佐渡に行ったことがなかった。想像以上に大きな島であることに驚かされた。佐渡金山の跡地はかなりの費用をかけて、動く人形を使い、往時の模様を復元してあった。一見に値するものと思った。

萩原先生は今回の全国大会に泊り込みで参加され、佐渡旅行も最後まで付き合って下さった。85歳のお年にもかかわらず、我々に勝るとも劣らない元気さであった。自己流体操とカラオケ修業をしておられるそうである。

（室谷邦雄　記）

よんまる会（40期・昭和13年卒）

わが同期会は函館、札幌、東京の三地域の回り持ちで毎年開催している。今年は函館開催の予定が、百周年に当たるので来年回しにして、東京が当番となり京都で全国大会を開催した。

集う者二十六名の内、夫人同伴が4組で、北海道方面からは十六名、東京支部会員の参加者が近い割りには少なく十名に過ぎなかったのは残念でした。不参加の理由は三人に一人は体調の不調を訴えており、寄る年波には勝てないものと実感させられた。

参加者は意気だけは盛んであるが、連れ立って歩く様は老人会の観光団そのもので、社寺の階段を登るとなるとほとんどが敬遠する。元気がでるのは夜だけで、遠来の客に敬意を表して二泊三日の旅程を組んでいるので、深夜にわたるを物ともせず、この時ばかりは60年前に帰って大いに気焔があがる。いくつになっても中学生の頃が懐かしく、最後はやっぱり「玄冥の北の一道」で締め括らないとおさまらないらしい。

（相馬正樹　記）

43期（昭和16年卒）

近藤達也函館支部長が5月17日入院先の函館病院で亡くなった。彼は第43期同期会にとって恩人である。卒業してから後、同期の仲間が会合をもつことなく約20年を経過した昭和37年5月国鉄中野寮において初めて同期会を開催してくれたのが近藤君であった。

そのとき、われわれが在学中の5年間担任長であった宮崎宗孝先生を東京にお招きし、20年前のご恩に感謝する機会を設けることも近藤君の発案で実現した。

彼が東京を離れた後しばらくの間、東京の同期会は有名無実の状態が続いたが、今は亡き辻善郎君が鈴木達男君とともに中心となって再興して以来現在まで毎年2回程度会合しているし、会員数も60名近くを数えている。中には広島や西宮、新潟など遠方にいる仲間も最近は会に出席するようになり、仲々盛況である。

第43期同期会の基礎を作り、育ててくれた近藤君を失ったことは残念至極であるが、天命とあきらめるしかあるまい。

（井筒吉彦　記）

翠楊会（45期・昭和18年卒）

平成5年は翠楊会員にとって函中卒業50周年にあたり、秋酣の10月10日函館温泉ホテルで総会を開催。参会者は函館27名、札幌道内10名、東京本州14名で合計51名に、浜岡・井上両先生を迎えて盛会であった。年毎に鬼籍に入ったり、病床に伏す級友も増えて来るが古稀の齢を重ねれば止むを得ない事であろう。総会、懇親会に続いての二次会では、沖の「イカつけ」の漁り火を眼下にしての尽きぬ語らいは、正に函館ならではの心に残る情景であった。

翌日は、貸切りの市電に、職人を同乗、握り立ての寿司を味わい、ビールで喉を潤しながら市内観光を楽しむという、童心に帰っての50年目の同期会であった。

翠楊会東京支部の会は平成6年2月18日、新宿住友クラブに17名が出席して開催。「翠楊会50周年の集い」の報告と、寿司電車のビデオに登場する級友の姿を眺めながら、昔話に花を咲かせ、再会を約して散会した。

（田沼修二　記）

卒業50周年記念同窓会に出席して

46期（昭和19年卒）

私達46期生は昭和19年（一九四四年）に名門函館中学校を卒業しました。当時はアッシ島、サイパン島の玉砕等敗戦の色も次第に濃く、軍国主義台頭の中で国防色の制服ゲートルに身を包み軍事教練に励むなどまさに灰色の青春でありました。時は流れこの暗い辛い青春時代も今では懐しい思い出となっています。

さて今年は学窓を出て50年、早や半世紀が過ぎました。想えば戦中戦後の苦難の道を歩み、共に今日まで生き延び古稀を目前にして感無量の境地です。

この記念すべき時に全国に居る同期生が相集い共に健康を祝し、旧交を温めようと、去る6月11日函中第46期卒業50周年記念同期会を地元の函館国際ホテルで行った。出席者は夫人同伴など含め一〇〇名を超える盛大なパーティでした。

行事内容を紹介すると

一、母校見学

二、市内観光（トラピスト、五稜郭、元町界隈、遺愛女学校等々）

三、物故者80余名の慰霊祭

四、記念写真撮影

五、祝賀パーティ、二次会は松風町のクラブ市

六、翌日は有志によるゴルフコンペ（函館シーサイドC・C）

等々であります。

時は恰も百花繚乱の季節、当日は雲一つない好天に恵まれ近くの臥牛山（函館山）も新緑に萌え、久し振りに吸い込む故郷の空気のにおいにふと青春の感覚が甦ったようである。

中でも今回印象に残ったのは禁断の園である遺愛女学校の見学であった。想えば函中時代母校と隣り合せにあり、我々函中生の憧れの象徴でもあった、しかし当時は男子禁制の庭で一寸覗くだけでも罰せられる時代であった。時は変り今回初めて足を踏み入れ教頭の案内で校内の隅々まで見ることが出来たのは大きな収穫であった。教頭の説明によるとこのミッションスクールの美しい白壁からホワイトハウスと呼ばれ函館八景の一つに挙げられており、又北海道を代表する有形文化財（一九八二年）にも指定されたそうです。

今回の50周年記念同期会には卒業以来初めて会う同期生も居りほんとうに楽しい集いでした。

我々の人生も残り少なくなってきましたが、共に健康に留意し、5年後（55周年）の再会を期したいと思う。

最後に今回の記念行事の運営に尽力された実行委員諸君に対し、厚くお礼申し上げる次第です。

（渡辺保二　記）

47期（昭和20年前期卒）

年に一度の7月7日ならぬ4月7日、織姫のいない牛どもが集まり、若き日の悪童時代に戻って一時を過ごしています。

今年も有楽町ニュートーキョー、パブレストラン「ロチェスター」で開催。

札幌から成田氏（例年出席）江差から道議の小田原要四蔵氏を加えて24名がタイムトンネルを潜りました。韻文指導の鎌田先生、ボンズの「夏殷周春秋戦国時代」「白楊画会」50年も口にしたことのない言葉と記憶がはっきりと蘇ってきました。

運営は、当日の会費は全部使い切る。従って会計報告無し。慶弔の手配はしない。などの条件になっています。

年金生活受給の年齢に達した皆さんですが、元気さは格別で、次回を約しました。来年の百周年は、函館でもと張り切っています。

昨年まで毎年元気に盛り上げ続けていた渡辺幸夫氏が亡くなられました。ご冥福をお祈りします。

（松村　豊　記）

九十九会（49・50期・昭和21・22卒）

我々は、太平洋戦争直後の混乱期に、4年と5年で卒業した。同期会は当然一緒である。卒業30周年記念に九十九会と命名し、40周年記念には「集滴」なる記念誌を発行した。所在不明者は数名に過ぎない。いずれも教育大函館分校を先年退官した名幹事中村幹夫君の、長年にわたる献身的な努力の賜物である。

毎年、函館・札幌・東京・関西で同期会が開催されている。特に数年前に発足した関西九十九会は、名古屋以西に点在する数名の期友による開催地持ち回りというユニークな会で、今年も四月に長崎のハウステンボスを中心に開催された。

東京九十九会は20人強、毎年の同期会は都内での飲み会で、いつも20人を下らない。しかし昭和四年生まれの65歳が中心で、殆ど年金年齢である。暇になったらしいので酒はともかくとして、顔を合わせる機会を多くしなければと、万年幹事は目下考慮中である。

（伊東克郎　記）

あずまし会（51期・昭和23・24年卒）

・総会、懇親会

平成6年4月14日　於日比谷『聘珍樓』

参加17名

総会では、会務および会計報告、役員改選等の後、母校記念協賛金の扱いについて協議し、各会員に協力をお願いすることを決めた。

懇親会では、欠席者の多くが体調を崩していることから、健康に留意し、来年の百周年記念式の前日の「どんじり会」に多数参加しようと誓い合い、同窓会歌と「どんじり会の詩」を斉唱して散会し

たが、ほとんどが二次会に残り、元気一杯のところを誇示し合った。

（三国比左男　記）

玄羊会（52期・昭和25年卒）

東京玄羊会が7月2日（土）午後6時からニュートーキョー桃杏楼で開催された。久し振りに参加者32名の多きに達し、函館から代表幹事の田中君も同席してくれた、

冒頭故人となられた竹沢崇君のご冥福を祈り全員で黙禱を捧げた。そのあと代表幹事佐藤信君から当会開催趣旨を含む挨拶が行われ、その中で竹沢君の死に至る経緯の説明も加えられた。次いで田中君から函館玄羊会総会の模様が報告され、特に来年の卒業45周年記念大会には多勢の友人と元気な姿で迎えたいこと、函中百周年事業の協賛については各支部の目標を達成してほしいとの要望があり、これらの意見交換が行われた。このあと宴に入り、古巣の大津へ戻る安藤君の惜別の辞、ニューヨークから帰られた井上稔君の挨拶、そして各自の近況ひとことが披露され和気あいあいのうちに会は終了し8時半に散会した。二次会は後輩各期の方々が設営された大パーティーに10数名参加し若やいだ雰囲気の中楽しく過ごした。後輩のご尽力に多謝。

（長島　康　記）

福禄会（56期・昭和29年卒）

去る6月5日、風光明媚な伊豆・今井荘で『卒業40周年記念関東地区同期会』を盛大に催した。おもえば、入学の昭和26年に私達は、サンフランシスコ講和条約調印について、昨年解体された木造体育館で大根田校長先生の訓示を拝聴し、金融引締が厳しかった昭和29年に卒業した生徒である。本州との往来には、青函連絡船をどれだけ利用したことか。タラップを下りた3等船室、両舷の丸窓に打ちくだける波涛。この荒波（人生）を乗り越えての節目の会合でもあった。

参加者36名（男性21名・女性15名）この内、函館から鈴木進君、船山圭右君、星野泰子さん、鍋谷博子さん、丸藤悦子さん、荒井堅治君と奥様、鹿児島から徳森涼子さんの参加があった。

山崎君の総会企画の順序に従い、浅岡君の司会のもと、まず歓談に入る前に全員記念撮影を行った。幹事を代表して、会場の世話を一手に引受けてくれた若林君から開会の挨拶を、同時に物故者への黙禱を捧げた。続いて、星野さんの乾杯で懇親会に入った。上京の諸君から、函館の同期会の近況報告と函中百周年記念行事のことを、内藤君が関東地区同期会と東京支部同窓会について報告や協力依頼があった。また、この会が今日あるのは黒川陸郎君（昨年死去）、大西孝司君、鈴木進君の永年に亘る尽力によるもので、当会から感謝の印として記念品を贈呈した。

宴会に目を移すと、自慢の献立料理が次から次へと提供され、特に地物伊豆産伊勢海老の具足煮が圧感であった。歓談は続き、和気藹々、談論風発という状況であった。座も自然に乱れ、お互い酒を酌み交し、スナップ写真に思い思いのポーズをとった。あい間に、次年度幹事を選出し、反町金四郎君、柴田雄君にお願いすることになった。校歌を吉田孝君指揮のもと、声高らかに斉唱した。踏まんかな希望の門途……。最後は、この会が末長く続くよう祈りをこめて、反町君の音頭で三三手拍子で締め括った。二次会はカラオケ会場に移し、それぞれ持ち歌を披露し、すこぶる盛り上がった。三次会は「深夜の宴」を別室に設け、更に歓談した。大量のアルコールが通過したにもかかわらず、酔いどれもなく、紳士淑女であった。

翌朝、数人の企業戦士の早朝出勤があったが、まずはモーニングビールで乾杯。引き続き有志で、伊豆観光バスによる西伊豆観光を実施した。堂ケ島の洋ランセンターを見学し、その美しさに驚嘆した。途中、車窓より入江に碇泊中の加山雄三氏所有のクルザーを一見したりして、土肥のなぎさ亭で海鮮料理の昼食を味わった。ここでもランチビールで乾杯。新幹線三島駅で、またの再会を誓い散会した。

散会後、一部の人達は余韻さめやらず、東京駅を振り出しに赤坂、両国を痛飲に痛飲を重ね、午前様になったと、後の便りで知った。

40年たっても、皆んな活力に満ちあふれ、どの人も輝いていた。

（小林利夫　記）

三・三会（60期・昭和33年卒）

三・三会、昨年は5年毎の全国大会の年である。卒業35周年全国大会となるわけである。

平成5年10月9・10日の両日、大沼国定公園「湖畔亭」で開催された。

「湖畔亭」は、同期の川村佝子（旧姓藤田）さんが、夫君剛君と大沼公園内川魚料理「源五郎」とともに経営にあたっている。

第一日目10月9日は、各自それぞれに湖畔亭へ午後5時半までに集合となっている。4時過ぎには、受付を準備して、幹事が待ち受ける中を、函館から東京から札幌から集まり始める。

例によって「ようしばらく」「元気だったか」とそこここで歓談が始まる。

卒業以来初めて会った、即ち35年ぶりという面々もかなりあった。集まったのは、合計49名である。恩師は、浜岡栄一先生がお元気な姿を見せて下さった。

賑やかな開宴となったが、宴はもう何もいらない、話があればいいというとこ

ろで、広い会場の中であちらこちらと歓談の塊まりができて、いや全くもって賑やかを通り越して喧噪の巷というところである。特に、卒業以来初めてというメンバーは、お互いに「どうしている」「どこにいる」と延々と話し込んでいる。

たちまちにして時刻は、夜の11時。全員が、開宴後5時間も経っているなんていうことを意識もしていない。12時になって「旅館に悪いから」とようやく解散になった。

翌10月10日、前日と違い、天気が気がかり。出発の9時前に、残念ながらとうとう雨が降り出した。

今日は、まず遊覧船で湖上遊覧、その後バスで函館市内へ戻り、新校舎見学、市内観光と続き、午後5時函館駅前で解散というコース予定である。

9時に湖畔亭前の船着場から遊覧船に乗り湖上遊覧に出発。途中から雨足が強くなり、下船の頃はどしゃぶりになってビショビショに濡れてしまう。皆、素早くバスに乗り込み、一路函館へ。途中で雨がほとんど上り、やれやれというところである。

母校では、教頭先生が休日なのに、わざわざ自らがご案内下さった。新校舎には、見るところ全て驚嘆の声をあげるばかりである。我々は60周年記念をやり、当時の新校舎に入れてもらったのであるが…、後輩の活躍は、まちがいなしと、一同喜び合ったところであった。

それから昼食、市内観光、函館山と予定通りのコースを巡り、函館駅前で解散となった。

5年後卒業40周年開催と決定はしているが、今度は札幌か東京か、何れにしても元気で再会しよう。

お世話になった川村佝子さんは、今年4月2日脳出血で急逝した。驚きの一言である。ただ冥福を祈るのみ。

（北原耕太郎　記）

63期会（昭和36年卒）

会者定離・愛別離苦・生者必滅・一蓮托生、これは63期会第12回東京同期会の案内状に書かれていた一部です。昨年より深く過激な文章にヤレヤレ・ウンウンの声と共に7月2日（土）5時有楽町桃杏桜に北は札幌、函館、西は広島、神戸からはるばる集まった42名（初参加7名）一瞬のうちに青春時代の真只中。途中隣の会場で同期会を開催中の吉田信一先生も加わり相変らず大変ニギヤカな会となりました。ただやはり悲しいニュースもありました。大阪在住の佐藤勝宣さん（通称ゾウさん）が6月12日亡くなられました。同期会の旅行にも何回か参加され皆で楽しく一時を過ごした事を思い出し胸のつまる思いがいたします。会の始まる前に小林幹事の音頭で黙禱をささげ御冥福を祈りました。二次会はいつもと少し趣向を変え、52期玄羊会・65期三八会・69期火ばし会そして我63期会の4期会合同の会を計画いたしました。先輩後輩の繋がりをより密にし、函中百周年に向けて東京同窓会をより良い会にしたいと願ってのことでした。何年ぶりかで会場で会った兄妹・部活の先輩後輩・初めて逢ったいとこ同志など結構面白い事がありました。玄羊会の二上支部長も大もてでありました。反省点は多々あるものの今後も続けて行きたいと考えています。来年又どのような出逢いがあるのでしょうか楽しみにしています。他期へラブ・コール。

（土橋道子　記）

函中三八会（65期・昭和38年卒）

本年度函中三八会は、7月2日（土）、午後5時より、東京・有楽町の〝ロチェスター〟で行われた。

同期会は、昭和52年の第1回目以来、毎年1回実施してきた。ここ数年は、開催日を7月の第1土曜日と一定にし、参加される方々に早めに予定を取ってもらうようにとしてきたが、逆に毎年同じ時期に欠かさず行うことでのマンネリ化のためか、ここ数年の参加者数30人程度になっている。

今回は、宮崎県日向市と静岡県清水市、福島県いわき市からの遠来の参加者も含め、男21人、女6人の計27人。卒業後初めて参加した小嶋正歳、名越晌一の両氏、たまたま東京に出張で来ていたという飛び込み参加でしかも卒業後初めての藪内

雅健氏、また当初出席予定ではなかったが仕事の関係で近くに来ていて久々参加の立石正和氏、遠路宮崎県から駆けつけた一戸光一氏、種子島から転勤して出席できることになった高野晃氏など、毎年欠かさず出席している顔触れとは異なった人が多数参加した。

会では、最初に久し振りの再会を祝して乾杯。しばし、懇談に移った。年1回は顔を合わせる仲間とは言え、卒業以来初めて会った人なども多く、積もる話に花が咲いていた。

しかし、仕事の途中で抜け出て来て途中退席しなければならない人がいたため、いつもなら最後に行う各人の近況報告を

一通り行った。時間が限られていたので出来るだけ手短にとお願いしたものの、話し始めるとそれぞれ話したいことが沢山あるのか少しずつ長くなり、超過しそうな時間を調整するのが大変であった。

その後、全員で早めに記念撮影を行った。そして、後は時間の許す限り、お互いに席を代えたりしながら、高校時代の思い出や近況報告などに話が弾んだ。

午後8時過ぎ、同じ店内にあらかじめ設けてあった二次会会場に移動。今回の特別企画として予定していた第52期、第63期、第69期との合同の二次会を行った。

合同二次会では、二上達也白楊ケ丘同窓会東京支部長のあいさつ。ここではクラブ活動や恩師のこと、取り壊された旧校舎のことなど、共通の思い出話で年齢の上下に関係なく、会場内の各所で話の花が咲いていた。

なお、合同二次会から、北海道教育大学付属小中学校の同窓会に参加して三八会には出席できなかった寺島嘉雄、松原忠之、山初省吾の3氏が合流した。

合同二次会終了後もなお別れがたく、三次会へと……。

（菅原大作　記）

心はいつも高校時代

しまる会（67期・昭和40年卒）

昭和40年卒業だから、語呂を合わせ、「しまる会」と名付けられた我同期会もあともう少しで卒業30周年を迎える。

私が東京で初めて同期会に出席したのは、今から10年程前であろうか。新宿・歌舞伎町の料理屋の2階で、自己紹介した時のあのチョッピリ恥ずかしかった思いは今も脳裏に焼き付いている。夫と子供の世話のみにエネルギーを費していた時分では、懐かしさというより、トキメキに近い感情だったのだろう。その同期会への出席も年1度と回を重ねていくにつれ、出席者全員が高校時代そのままの感情になっていることに気付き、他のシチュエーションでは絶対ない！……と、うれしい思いに浸っている。

そして平成7年の創立一〇〇周年・卒業30周年を記念し、我同期会は函館会、札幌会、東京会との合同旅行会を計画。時期、場所、宿泊日数、宴会での出物など、なんとかこれを成功させるべく、日夜（？）無い知恵をしぼっているのである。エネルギッシュに教えてくれた先生、卒業以来会っていない人、転勤のため札幌に行ってしまった人、そして片思いだったアイツ。少女のごとく心浮き立ってくるのだ。

思えば、とびっきり成績優秀だったとは決して言えない我同期。超有名なスーパースターも出ていない我同期。しかし結束は堅い！当初参加数が少なかった女性達でさえ、最近は数も増え、中部高校の女生徒としてのあの力強さを発揮している。こういう私でさえ、今や幹事の一端を担っているのだから不思議だ。

（菅野蓉子　記）

火ばしら会（69期・昭和42年卒）

69期「火ばしら会」東京支部、平成6年度の集いを7月2日午後5時より銀座ニュートーキョーのロチェスターにて開催。

初の出席者3名、河村裕氏、米崎雅夫（旧姓館）氏と沢田正子さん（旧姓長谷川）の初参加者恒例の挨拶から。河村君は高校時代からの相変わらずのダジャレ、米崎氏はただただひたすらに懐しがることしきり、沢田さんからはスチュワーデス時代のお話などもお聞きすることができました。

又、久し振りに、神戸から畠山さん（旧姓高沢）、新潟からは山本君が本場の「越の寒梅」持参で出席。少しずつ皆で飲んだ「越の寒梅」のなんと美味であったことか！何事も満腹ではおいしさも、ありがたさも薄くなるということがよくわかりました。

二次会は52期、63期、65期との合同でちょっとしたミニ同窓会、結構盛り上っていました。

来年は誰が初参加で挨拶をしてくれるのか、とても楽しみにしています。

（吉田　淑子　記）

会員短信

・**佐々木孝允（昭和8年卒）**
函八会は60周年大会を今年函館にて開催参加しました。新潟での環日本海駅伝国際マラソンの実行委員で忙殺された1年でした。

・**中道栄一（昭和10年卒）**
手術後5年経過し、医師に同窓会等できるだけ参加するよう勧められているので体力抵抗力の回復に努めています。

・**柿本大壹（昭和11年卒）**
鹿児島には昭和24年から住むようになり台風には馴れているものの、この8月豪雨に見舞われ家族一同深刻に悩んでいます。南西北海道沖地震はより被害がひどかったようですが、とにかく地球の先行きが怪しいこの頃です。東京白楊だより楽しく読ませて戴いています。

・**佐々木忠郎（昭和14年卒）**
短歌誌「アララギ」の選者を担当、自己の作歌の充実と後進の指導育成に尽力しています。NHK学園の短歌講師も続けています。

・**浦田常治（昭和17年卒）**
「瞼の函館」ドレミ楽譜出版社テープテイチク作品集「希望の泉」音楽之友社、御希望の方はおしらせ下されば差し上げます。

・**篠田作衛（昭和20年卒）**
東京白楊だよりは年を追うごとに充実し面白くなってきているように思います。これからも多彩なものにして下さい。

・**大久保博正（昭和22年卒）**
キッコーマンを退社、子会社も退き自適の身、現在身辺の整理中、歴史の勉強をやり直そうと、武蔵大学の都民大学課外講座に通学中。

・**菱山照干（昭和29年卒）**
貴誌にて名詩〝青春〟に巡りあい青春を考え乍ら読みました。函中は2年間の縁でしたが、函館は限りなく懐かしい想い出の街です。

・**兼平亘（昭和30年卒）**
遠く離れた津軽の片田舎で内科医を開業していますが、これからは支部の一員として大会にできるだけ参加したいと存じます。

・**山本善治（昭和31年卒）**
東京白楊だより16号で浅間先生の訃報に接し、驚いています。7年前の同期会でお会いしたのが最後になります。堀川町近くの焼鳥屋に連れて行って戴いたことなど、いろいろ思い出されます。ご冥福をお祈りします。

・**渡部顕（昭和30年卒）**
歴史の大転換期、白楊魂を発揮し全精魂を傾けて、従業員も会社も血を流さずかつ、二千年に世界に貢献できる日本を目指して頑張っています。

・**及川守（昭和32年卒）**
世の中、また不景気になっておりますが、〝地固まる〟事になるのでしょうか。多忙です。

・**古川セツ（昭和32年卒）**
夫古川静二郎（21年入）が大腸がんで93年9月14日亡くなりました。専門が日進月歩の電子工学ということで、同窓会にも出席する暇もない生活で59歳の東工大在職中のことでした。皆様の一層の御健康をお祈りします。

・**伊藤紀子（昭和32年卒）**
上京して20年、何かと標準語になっていますが、函館へ参りますとスムーズに函館弁になります。百周年も目前、記念会館の完成が待たれます。浅間先生をしみじみと思い出しました。

・**平田陸正（昭和34年卒）**
白楊だより懐かしく拝読しました。岩手医大に勤務して30年になり、その間国内外と数多くの学会に出席して来ましたが、今年7月初めて故郷函館の湯ノ川温泉で学会が開かれ、久し振りに帰省することができました。齢を重ねるに従い函館をより懐かしく感じ、同窓の方々と是非お会いしたいものです。

・**小林嘉則（昭和36年卒）**
63期会は50～51歳の働き盛りの多忙な年齢です。年1回の同期会は7月第1週の土曜日に行われ、東京での開催は11回目になります。秋たけなわの11月中旬には関東と関西の仲間が合流しての旅行会も今年は8回目を迎え、金沢・加賀温泉への1泊旅行があります。いつまでも元気で集まりたいものです。

・**阿部佑二（昭和37年卒）**
同期会（9月25～26日熱海）に初参加。名前と顔のわかる人が2割程度で驚きました。

・**大谷貞彦（昭和38年卒）**
2月に広島支店へ転勤となり、また単身赴任生活が始まりました。広島での北海道出身者は少ないようですが、中にパラパラ存在しています。元気でやっています。

・**男谷洋子（昭和44年卒）**
20数年振りで同級生に誘われ、同窓会に出席することにしました。感慨無量のものがあります。

・**片岡進（昭和44年卒）**
高校時代から続いた夜遊びアウトドアライフは3年前に肝臓をこわしてリタイヤ。今や健全なアウトドアに精進しています。オートキャンプ、バイクツーリングと進んで今はサイクリング、山登りと野生の血の原点に戻りつつあります。千葉周辺の同好の士を求めます。

・**三浦賢治（昭和45年卒）**
千葉県佐倉市から北陸加賀に単身赴任してます。北陸は初めてですが、地方新聞で北前船や高田屋嘉兵衛のことに接し、函館を懐かしく感じています。

・**富田剛（昭和48年卒）**
名古屋より名鉄で50分のベッドタウン岐阜県可児市に在住です。名古屋支部というのがあれば参加したいと考えています。

訃報

白楊ヶ丘同窓会函館支部長近藤達也氏が脳梗塞で五月十七日、入院中の函館病院で亡くなられました。

氏は函中43期生（昭和16年卒）、早稲田大学文学部卒業後国鉄に長らく勤務され、退職後は函館医師会事務長、話し方教室の開設、経営コンサルタント等で活躍され、函館支部長としても六年間、また百周年協賛会事務局長として任に就かれておりました。人望も厚く、これからも期待されていただけに残念な事です。

心よりお悔み申し上げ御冥福をお祈りいたします。

随想

達人に学べ、

35期　薮越　甲平（昭和8年卒）

手許の「広辞林」によれば、「達人とは、学術、又は技能に達し、人生を達観し、さとりをひらきたる人」とある。

徳川家康は、日頃、学者、僧侶、茶道、謡曲、兵法、武芸、刀剣の師匠、更に、有能な堺の商人らに接し、その考え方、意見をきいて、施政の参考にした。

これらの人は、いずれも、当時その道の達人である。

政治、経済の低迷する昨今、政財界のリーダーは、この家康の歴史上の事実を大いに学ぶ必要がある。

最近、テレビの街頭録音や、新聞の一般投書欄の政治批判や、景気動向への意識を取りあげ、これを国民の意識とか、世論とする風潮がよくあるが、これがほんとうの国民の声か真実なのかは疑わしい。

リーダーは誤った世論と、真実をはっきり判断する能力を絶対に必要とする。

そのためには、自分と異質の、その道の達人と常に接し、意見、考え方を把握することが、肝心である。

碁、将棋の世界でも、高段者は、対局に当り、目先にとらわれず、常に大局をみて、更に数手先まで読み、慎重に次の手を打つ、まさに処世万般に適合する原理原則であるが、達人は時間をかけて、盤面上の現象、事実をはっきり認識してこれに対処する。そこが凡人と違ふ。

達人は、技能、経験を積み、年功を経て到達する。従って、どんなに技能がまさっても、若年者は達人になれない。

反対に、老齢になって、著しく洞察力が衰えても、自信過剰で、現役にしがみついているのは、老醜をさらし、見苦しい。これを老害といふ。政財界には、特に多いが、心すべきである。

白楊ケ丘同窓会支部長の二上達也さんは、棋道の達人。社会経験、年功も十分大いに各界に意見を開陳して、御活躍を期待したい。

ツルの子育てに学ぶ

40期　相馬　正樹（昭和13年卒）

一九九〇年、私の提唱する渡り鳥の行動生態を人口衛星によって追跡する実験が、鹿児島県出水市で越冬するマナヅルについて行われた。ツルに小形の電波送信機を背負わせて、衛星を介してその位置を計測しながらルートを追跡する方法である。

3年間の実験を通じて、繁殖地シベリアから出発して越冬地の出水に飛来するツルの渡りのルートが初めて明らかになった。そして、朝鮮半島の2～3カ所の中継地が特定できて、それを取り巻く湿地の環境の詳しい情報も収集され、大きな成果を上げた。これは昨年開催された「ラムサール条約」締結国の国際シンポジウムで発表され、内外の研究者、自然保護関係者は驚きと感嘆の声をあげた。

そして、朝鮮半島の国境地帯の中継地における「ツルの子別れ」が話題になった。越冬地で観察されるツルは、常に家族単位で生活する親子関係の親密な鳥である。それが、故郷への帰途に立ち寄る中継地で、親鳥は生後1年足らずの幼鳥を徹底して苛めつくして親離れを促す。それでも離れないときには、親が子を置き去りにしてまでも別れなければならない。それは、繁殖地に着くまでに子別れして、幼鳥を自立させなければ、次の子育てができなくなるという厳しい宿命を負っているからである。親子に取り付けた電波送信機が、この子別れの実態を詳細に捕捉して、その厳しい生き様が感動を呼んだのである。人間の場合も、親の子離れのまずさがいかに子供の自立を阻害しているかを考えるとき、ツルに学び賢くなれと叫びたい。

（東海大学名誉教授）

ワープロの記

54期　佐藤　正郎（昭和27年卒）

機械は精密であるほど魔性であり、敬して遠ざけるべき存在であると信じてきた。銀行員の頃、最大の苦手は端末機のキーボードであったし、いまでもヴィデオは再生機能しか使わない。その私が還暦を期してワープロに手をだした。

主たる動機は自叙伝の製作である。いずれ私も死ぬ。「去る者は日々に疎し」の法則が貫徹し私の存在感は急速に薄れ、消滅する。断固これに抵抗しよう。少なくとも2人の子供には……。その手段は自叙伝である。発行は2部でいい。リタイアすれば時間はいくらでもある。老いは手を震えさせるがキーボードは打てる。何よりも読み易いではないか。脱稿したらコピーして製本すれば足りる。発行コストは格安というものである。

従たる動機はボケ防止。古来ボケ防止の妙薬は胡桃割りだが、ワープロでの自叙伝執筆が遥かに知的で生産的である。（麻雀こそベストとの説もあるが、私の場合麻雀は極めて非生産的なのである。）

早速3万円で中古のワープロを入手した。使ってみると容易ではない。キーの数がやたらに多いうえ、「あいうえお……」がメチャクチャに並んでいる。目的のキーを探しているうちに書こうとしていたことを忘れる始末。ワープロを志す以上目標はブラインドタッチだが、「日暮れて道遠し」を絵に画くごとくである。さてどうするか。結論はこうであった。

ブラインドタッチとはキーボードを見ずに打つこと、すなわち指にキーの方向と距離を知覚させることである。それなら指ごとに担当するキーを決めよう。キー数は少ないほど良い。この点ではローマ字入力が断然有利である。かな入力には48のキーが必要だがローマ字は22で済む。また指とキーの位置関係は常に一定であるべきだが、それには手首のおき場所を特定すれば良い。そして飽きない程度に毎日練習しよう。会社にワープロを持ち込み、始業前と昼休みを各々30分づつこれにあてることにした。すると月～金を2回、つまり延べ10時間でブラインドタッチとなったのである。

なってみるとなかなかいい。鉛筆を削らなくてもいいし消しゴムの滓もでない。おまけに国語知識のいいかげんさも発見できる。例えば「つずく」と入力しても「続く」とは絶対に変換してはくれない。機械はまことに律儀なのである。

いま私の夢はリタイアに向けて虹いろに拡がる。まず書斎を整理しよう。そして入念に構想を練るのだ。存在感を誇示するためには面白くなくてはならないか

らである。取材も欠かせまい。写真のあるほうが興味も深かろう。生れ育った道南各地をカメラ片手に旅する姿が目に浮かぶ。少年時代のハイライトは函館だが、だからといって檜山や奥尻を省くわけにはいかぬ。少年のほのかな恋を書くべきか否か。なにしろ妻は私より確実に長生きしそうなのだ。それよりも取材の過程で焼けぼっくいに火がついたら……。

残る懸念はただひとつ。自叙伝への夢と意欲は、果たしてリタイアの日まで持続するものであろうか……。

我青春の映画

63期　小林嘉則（昭和36年卒）

昔の手帳をめくっていたらその年に見た映画のリストが出て来た。本数を数えてみたら中学2年頃から高校3年の卒業まで年に一〇〇本平均で見ていて、よくそんな時間があったものだと自分ながら驚いてしまった。

中2の時に「居酒屋」「バラの刺青」等を見ているのだが、男女の愛憎が良く分からなかった。しかし「ピクニック」でデビューした、〝キム・ノヴァク〟という女優に出会った時の印象は今でも忘れられないほど、セクシーだった。

中3で見た「道」の〝ジュリエッタ・マシーナ〟のあの悲しい眼。「汚れなき悪戯」の少年の澄んだ瞳も鮮明だ。映像として恐ろしく感じたのが「蜘蛛巣城」。砦から見える竹林が大きく揺れ動きながら攻めてくる画面は何とも不気味だった。

函中に入って3年間バスケットに明け暮れ、勉強に追いつかず苦しい思いをしていたにもかかわらず映画の本数が減っていないのは、やはり机に向かっていなかったんだろうなと今頃気がついても遅かりし由良之助。しかしひとつひとつ胸に刻まれた知識、思考、人生は計りしれなく、今の自分を作っている一部と思う。

特に高1に見た「死刑台のエレベーター」はフランスヌーヴェルヴァーグの先端を切り、新しい映像感覚とモダンジャズという音楽を教えてくれた。その後の仏映画は「いとこ同志」「恋人たち」「大人は判かってくれない」「勝手にしやがれ」等印象深い若者の生き方を描き、とても影響を受けた記憶があるが、同じ仏映画でも「太陽がいっぱい」はあの物悲しいテーマ曲とラストの何ともいえない虚しさと青い空、そしてアランドロンの甘いマスクが忘れられない。

当時は洋画ばかりだったが「人間の条件」は原作6巻を一気に読んでいた事もあり、戦争や軍隊の悲惨さに怒りを覚えながら骨太の日本映画を見た気がした。

邦画はこの当時から入場者数が減りはじめちょうど自分の高校時代が一番ピークにあった事は後になって知った。

高3の時は、60年安保の6月に樺美智子さんが死んだ年で、安保が何かも良く知らないまま日本中大騒ぎしていた事だけ覚えがあり、ノンポリの自分はデモにも行かず映画ばかり見ていた。

邦画は「楢山節考」「荷車の歌」「人間の壁」とか暗い映画がベストテンを埋めていたが、一方石原裕次郎が全盛でもあり、これ以降昭和39年のオリンピックに向かってテレビ時代に入っていくわけで映画の衰退は目に余るものがあった。後年映画狂い好じて助監督になり「人間の条件」の小林正樹監督に師事する事になるが、紙面の都合上次の機会に又。

第18回親睦大会講演者紹介

動物生態研究
菊池昶史（きくちひさぶみ）氏

今回第18回親睦大会（10月21日）の講演をしていただくのは52期二上支部長と同期の菊池先輩です。

菊池氏は現在茨城大学理学部付属潮来臨湖実験所講師を努め、白鳥の研究者として知られております。

白鳥の季節がやって来ると、茨城県内の白鳥飛来地と飛来数を調査する為、休日を利用してはあちこちの池や沼で観察してはスケッチと、シーズン中は大変忙しく「朝の4時、5時から出かけていくんです」と夕暮れまで車で走り回るそうです。

「人間がエサを与えることでここまで慣れさせたのはある意味ではいいことなのですが、自分でエサを取ろうとしなくなってしまった。自然界のエサは底カロリーですから1日中エサを食べていなくちゃいけないわけで、それが白鳥の運動になるんですけど…」とエサに困らない白鳥にとっての善しあしを指摘しています。

コハクチョウを追いかけてシベリアでの観察記「動物の故郷を訪ねて」の講演をぜひ拝聴して下さい。

因みに菊池氏は、つい3年程前まで函中で40年にわたり教鞭をとられた菊池禎祥先生（通称オモチャ）の御長男です。御兄弟が多くて、あちこちの期に「コモチャ」がいたと聞いていますが……。

↑コハクチョウの巣と卵を前にして

ヘリコプター待ちでアンドレ君とあやとりを楽しむ→

白楊ヶ丘同窓会東京支部ゴルフ部会

〝ポプラ会〟第三回開催

平成六年十月六日(木)・白鳳カントリー倶楽部に決定

昨年第16号。〝東京白楊だより〟で御案内した〝ポプラ会ゴルフコンペ〟も今回第3回の開催となります。1回目の11月9日、GMG八王子ゴルフ場では22名が参加して行われました。その時の優勝者52期の竹沢崇氏の幹事で平成6年4月7日、源氏山GCで第2回目が予定され、その準備中竹沢氏が入院、延期も考えたのですが本人の希望もあって当日開催の運びとなりました。

残念ながら4月24日、第1回目の優勝者の訃報を知る事になりましたが、常々ゴルフを通して同窓会が楽しくなればと熱心な理解者だっただけに無念の極みでした。

第2回の優勝者は65期の鎌田佳勝氏。午前中56と大叩きのあと午後から40を出し、第1回の4位につづいて実力を発揮しています。

先輩、後輩、女性(いずれも紅一点)交えて和気あいあい、皆さん夫々のゴルフ談議に楽しい1日を過しております。

さて、参加方法ですが、前2回とも評議員を通して連絡をもらっていたのですが、今回は会報の案内を受け取ってからハガキを出していたのでは時間的に間に合いそうもありませんので、直接御返事をいただきたいと思います。又今回都合つかず参加出来ない方でも次回の御案内を致しますので登録だけでもかまいません。ゴルフを通しての新しい同窓ネットワークに御参加ください。

日時 平成6年10月6日(木曜日)
8時半集合(9時半スタート)

場所 白鳳カントリー倶楽部
千葉県成田市磯部字挟間8
電・〇四七六・三六・一一三一
JR成田駅よりタクシー10分
成田インターより15分(7K)

会費 記念品・賞品代 三・〇〇〇円
パーティ代 三・〇〇〇円

競技 6組24名、18ホールストローク
ダブルペリヤハンディキャップ

連絡 電話〇三・三四一一・一二四一
FAX〇三・三四二四・六八五四
副支部長 小林嘉則まで

交通 出来るだけ最寄りの駅から夫々の車に分乗して行きたいと思います。

〝ほら武の会〟結成しませんか

在学中、音楽部に所属していた方、思い出して下さい。放課後音楽室で声高らかに歌った事。親睦会で大沼に行ってボートを漕いだ事。白楊祭でハレルヤ・コーラスを歌った事。そしてなぜか自分達の歌声に感動した事などを。そこで顧問をなさっていらっしゃいました(校歌の作曲者でもあります)酒井武雄先生を偲び〝ほら武の会〟(仮称)を作りたいと思います。

先輩、後輩仲良く歌い、飲みおおいに語り合いましょう。会に参加される方の名簿を作りますので御連絡下さい。大会当日(10月21日)を第一回会合とし会場でも受け付け致します。

連絡先 63期・土橋道子(旧姓山本)
〒三七六 浦和市仲町四―七―九
〇四八―八六三―九八二七

平成5年度東京支部会計決算書

収入の部		支出の部	
前年度繰越	3,557,001	総会関連費	1,274,930
総会費(150名)	1,050,000	会報関連費	594,567
年会費(1,060名)	2,120,000	事務費	423,459
利息	112,567	会議費	167,206
雑収入	74,420	雑費	414,047
		次年度繰越	4,039,779
計	6,913,988	計	6,913,988

編集後記

・亀井勝一郎氏とも同期であった26期田中清玄氏が昨年12月逝去されました。氏は東京支部の顧問として設立時より御協力いただいておりました。新聞記事や出版等でフィクサー的人物像ばかり強調されておりますが、親交のあった森本貞子さんの記事や弘前高校で後輩になる田沼修二氏の原稿で別の一面を知る事が出来ました。

・当時〝白楊時報〟をしっかり読んでいた生徒がどれ程いたか疑問の声もあるかもしれませんが、戦後間もなくの旧制中学の息吹がまだ残る発刊時のいきさつから、その時の社会問題にどう対処しながら多感な時代を考えていたのか、今改めて見直してみるのも面白いのではないかと思います。

・同期会が活発になっているせいでしょうか。〝各期だより〟の頁が増えて前号より4頁増になりました。活字をもっと大きくしてくれという先輩の御意見もあるのですが、原稿量が多い為申し訳ありません。

・年会費の改定、事務所移転に伴う諸経費の問題、組織の充実化等悩み多い状況ですが、皆様からの忌憚のない御意見を伺いたいと思っています。

発行 白楊ヶ丘同窓会東京支部
編集責任者 小林嘉則
支部事務所
〒一六〇 新宿区新宿一―一四―六
(御苑ビル)
スパース販売㈱内
TEL〇三(三三五二)六二八一